

2023年度

SC

## 小論文

3月12日(日)

人文社会科学部 (法学科)

10 : 00 ~ 11 : 30

【後期日程】

### 注意事項

#### 試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙、下書き用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(2枚)に受験番号を記入しなさい。

#### 試験開始後

- 3 この問題冊子は、5ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙、下書き用紙(1枚(表裏))を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。(下書き用紙と間違わないよう十分注意してください。下書き用紙は採点対象となりません。)
- 5 文字数制限のある解答用紙の記入については、下記の点に留意すること。

- ・問1・問2の書き出しは、一マスあけないが、問3はあける。
- ・段落を改めるときは、最初の一マスをあける。
- ・句読点は、それぞれ一マス使う。行の末尾については文字と同じ一マスに含める。
- ・小さな文字「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」は、それぞれ一マス使う。
- ・英数字は一マスに2文字入れてよい。

- 6 問題は、声を出して読んではいけません。
- 7 配点は、比率(%)で表示してあります。

#### 試験終了後

- 8 問題冊子と下書き用紙は、必ず持ち帰りなさい。

哲学者によって書かれた次の問題文を読み、以下の設問(問1・問2・問3)に答えなさい。

[問題文]

この章の前半では、言語が違って物の見え方は変わらず、むしろ言語には人類普遍的な側面があることを見てきました。では、「人間の行動は文化によって決定される」という主張、いわば「正しさは文化により異なる」という主張<sup>(1)</sup>は、妥当なものでしょうか。ミード(注1)の『サモアの思春期』(注2)が主張するように、文化が異なれば人間の行動や精神のあり方は大きく異なるのでしょうか。

1960年代から70年代にかけて、基本的な人間のあり方、社会の仕組み、ものの感じ方や考え方がかなりな程度、人類普遍的であるという研究が重ねられていきます。そして1983年には、ミードの『サモアの思春期』に書かれているサモア社会のあり方が、まったく事実と異なることを指摘した本が出版されます。デレク・フリーマン(注3)(1916~2001)の『マーガレット・ミードとサモア』(木村洋二訳、みすず書房)です。

彼は、サモアについての19世紀以来の調査や、自分自身が何年にもわたって重ねてきた調査の成果にもとづいて、サモア社会が非常に権威主義的で家長の権力が強く、子どもたちは激しい体罰を伴った厳しいしつけを受けながら育てられること、性に関する厳格な規範があり、そこから逸脱した少女たちは時に命を落とすほどの暴力的な制裁を受けることを示していきます。ミードの描く「南洋の楽園」のようなサモアは、事実とはまったく逆の幻想だということです。そして、サモアの少女たちも思春期には精神的な不安定に陥り、むしろアメリカなどよりも高い割合で非行に走るということ、さまざまなデータにもとづいて示しました。

結論として彼は、人間の行動は単に遺伝子が決定するものでも、文化が決定するものでもなく、その相互作用によって形作られると主張します。思春期に精神的な不安定に陥るのは、一面では人間という生物種の成長段階に組み込まれているのですが、それが実際どのような形で表出するかという点には文化的な違いがあるということです。そして、優生学における遺伝的決定論も、ミードのような文化決定論も、同じように非科学的だと言います。

フリーマン自身は、生物学的要素と文化的要素の相互作用の例として、サモアにおける敬語体系を挙げています。社会的序列についての複雑な仕組みがあるサモアでは、人々は反目や緊張に満ちた関係の中で生きています。そうした社会において緊張を緩和するために、また露骨な感情を表出して暴力沙汰になったりしないために、敬語体系が形成されたと言います。感情のあり方という人間に普遍的な要素と、社会のあり方という文化的な要素が作用しあって、敬語体系という文化的な現象が出現するのです。

さらに言えば、複雑な社会的序列の仕組みそのものも、社会を作って生きるという人間の生物学的な特性と、サモア諸島の自然環境などとの相互作用の中で形成されたものなのでしょう(この点については、フリーマン自身ははっきりと述べていません)。

人間の行動には生物学的・遺伝的な要素と文化的な要素の両方が関わっているというフリーマンの結論は妥当、というよりむしろ当たり前だと思われそうですが、この本は、その「日本語版への序文」の中

で彼自身が書いているところによると、「アメリカ合衆国において「地震のような衝撃」を引き起こした」そうです。

出版当時、すでにミードは亡くなっていましたが、アメリカの人類学会においてたいへん権威のある学者だと考えられていましたし、文化相対主義的な見方は、人間は生まれたときは白紙状態で育ち方によって違いが生じるという「民主主義的」な見方と相性がよいように思われます。実際、ミードはアメリカにおけるフェミニズム運動(注4)の旗手の一人でもありました。彼女は、女性が社会的に劣位に置かれているのは、女性が生まれながらに劣っているからではなく、女性を劣位に置く文化のせいだと考えていたのです。

フリーマン自身は、彼の本が「地震のような衝撃」を引き起こした一因は、ミードに対する個人攻撃だと受け取られたからだと述べていますが、やはりそれだけでなく、生物学的・遺伝的な要素が人間の行動に大きな影響を与えるという彼の主張が、優生学的な「遺伝的決定論」の一種だと誤解された点が多いのではないかと思います。

しかし、「人間の行動には生物学的な要素は関係ない。人間は生まれたときは白紙状態だ」というのは、事実と反します。「最初の感覚的な経験はカオス状態で、経験によって物が見えるようになる」などということがないと同様です。人間が感覚器官や脳といった知覚のための装置を備えて生まれてくるからこそ、輪郭のはっきりした物体が空間中の遠近に配置されているような仕方で物が見えるのです。それだけでなく、人間は「物には名前がある」とか「名前は種類を示すものだ」といったことをあらかじめ知っていると考えないと、子どもたちが言語を短期間でスムーズに獲得していくことも説明できません。

先ほど、「人間は生まれたときは白紙状態で育ち方によって違いが生じるというのは「民主主義的」な見方だ」と述べました。しかし、個々人の差がすべて育ち方によって生じるのだとすると、育て方を変えれば思いどおりの人間にすることができるということになります。つまり、「個々人の差は育ち方の差」という見方は、「人間は教育によって都合よく操作できるはずだ」ということを含意しています。先ほど「民主主義的」という言葉にカギカッコを付けたのは、そうした見方が一見すると「生まれたときはみんな平等」という「民主主義的」で「よいこと」を主張しているように見せかけておいて、その実、人間を都合よく操作するという全体主義的な発想を支えるものであって、真の意味で民主主義的とは言えないからです。

フリーマンの本が出てから7年後の1991年、ドナルド・ブラウン(注5)(1934～)は『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』(鈴木光太郎他訳、新曜社)を出版して、フリーマンの研究を高く評価します。この本のタイトルは、意味を補って訳せば「人間におけるさまざまな普遍的なもの」ということです。彼が言うには、その本を出版した当時はまだ「多くの人類学者、おそらくその大半は、すべての人間がすることを一般化する言い方には懐疑的」でした。多くの人類学者たちは、人間の行動における生物学的・遺伝的な要素を強調することに抵抗感があり、文化的な差異を強調することが重視されていたようです。

(中略)

いささか脱線しましたが、ブラウンに話を戻すと、彼は文化人類的研究だけでなく、進化生物学や心理学、言語学の研究成果も参照して、「普遍的人間」の特徴を数多く列挙します(中略)。

まずは、言語を持つこと。言語を用いて抽象的な思考を展開するだけでなく、他人をうまく操ったり、ウソをついたり、笑わせたりする。比喩を使う。物語や詩を作る。言語には名詞と動詞、固有名詞、代名詞があり、所有格もある。男性と女性、親族のカテゴリー、人間や身体の各部分、心の状態、動物、植物、道具、方向、時間などを示す言葉がある。ものを考えるときに、「～ではない」「～と～」「同じ」「等しい」「反対」などの論理的概念を用いる。

言語だけでなく、顔の表情によって複雑なコミュニケーションが行われる。人の心の動きについての理論を持っている。へびを恐れる。道具を作る。火を使う。誕生、出産、産後のケアのやり方が決まっている。集団生活を営む。自分たちの部族と他の部族を区別する。母子関係を核とする家族を構成する。子どもをしつける。近親者とそうでない者を区別して、さまざまな場面で近親者を優先する。インセスト(注6)が禁止されるなど性的関係に規制がある。

社会の中には地位や役割があり、年齢や性にもとづく分業がある。たとえば、おとなの男性が政治的に優位な立場を占める。共同作業をする。贈り物や、お互いの利益になるような交換を行う。未来を予測し、計画を立てる。集団全体に関わる「公的なものごと」があり、それについて決定するための手続きがある。指導者がいる。

寛容が称賛される。法的な規則があり、暴力やレイプや殺人は禁じられる。違反者は処罰される。集団内や集団間で争いがしょっちゅう起こり、それに対処するための慣習的な方法がある。善悪を区別する。礼儀作法やもてなしがある。甘いものを好む。宗教や呪術(注7)がある。通過儀礼や葬式などの儀礼がある。世界についての理解の体系がある。美的な基準があり、身体を装飾する。踊りや音楽がある。若者はよく遊ぶ。

こうした「人間における普遍的なもの」のリストは、ブラウン自身が述べているように、体系的ではなく、どちらかというと思いつくままに並べられています。挙げられたもののなかには、インセストの禁止などのように生物学的な理由によって説明できる特性もありますし、宗教や呪術などのように言語を用いて抽象的な思考ができるようになったことから派生したのではないと思われる特性もあります。火を使うことには生物学的な理由はあまり関係なく、どこかで誰かが思いついて始めたことが便利だから広がったのではないかと思われます。山火事など自然の発火は世界中どこでも起こりますから、火を使うことは歴史的にも地域的にも何度も思いつかれたことでしょう。

とはいえ、ブラウンが列挙する特性は、商工業やサービス業の発達によって人間の生活が大きく変化した現代社会においてもなかなかよくあてはまるものばかりです。

こうして見てくると、「正しさは文化により異なる」と単純に言えるわけでもない、ということになりそうです。つまり、人間<sup>(A)</sup>の行動や考え方、社会のあり方にはある程度の普遍性があり、文化的な多様性には限りがあります。人間が生物として生きていくうえで必要なことは基本的に同じであり、社会はまずはそれらを満たすために構成されるからです。

ブラウンのリストは、人間の行動をどのようなものとして理解するべきかという分類の枠組みを列

挙げたものと考えたらよいでしょう。たとえば、初対面の人と握手するか、抱き合うか、頭を軽く下げるかなど、具体的なやり方はたしかに文化により多様ですが、それらはいずれも「礼儀作法やもてなし」として理解できます。人間は初対面の人を前にすると緊張します。敵か味方かわからないからです。その緊張を緩和し、友好関係を築くためには、何らかの行動をとる必要がある。そのための行動が「礼儀作法やもてなし」なのです。

このように、一見すると自分たちの文化とはまったく異なるように思えることでも、それが何の目的で、どのようなニーズを満たすために行われているのかを考えれば、理解可能であることがほとんどです。要するに、さまざまな文化において具体的にどのような形の行動として現れるかは多様であっても、それらの行動の目的は人間にとってのニーズを満たすことなので、だいたい同じなのです。

もちろん、一見するだけでは理解が難しいような行為や慣習もあるでしょう。「正しさは文化により異なる」というのは、ある程度までは真実です。自分が育ってきた文化における慣習や行動に慣れ親しんでしまった後には、それが先入観となって、他の文化を理解することが困難になるかもしれません。しかし、だからといって「正しさは文化により異なる」と唱えることは、具体的にどこがどうして違うのかを理解する努力を放棄することにつながりがちです。それでは、他文化を尊重するどころか切り捨てることになります。たとえ困難であっても理解しようと粘り強く努力することが、他文化を尊重する態度の基本というものです。

(中略)

こうして見てくると、「人それぞれ」「みんなちがってみんないい」というほどには、人は違ってないと言えそうです。人間は白紙の状態で生まれてくるのではなく、動物の一種として、同じような身体と感覚器官や脳を持って生まれてきます。それだけでなく、人間の考え方や感じ方、ふるまい方など精神的な側面についても、かなりな程度、生物学的な習性が反映されているようなのです。たとえば、集団生活をするというのも人間の生物学的な習性の一つでしょう。文化は、そうした人間が共通して持っている基盤の上に作られていきます。

要するに、人間が生物として生きていくうえで必要なことは基本的に同じであり、社会はまずはそれらを満たすために構成されるのです。つまり、だいたい似たものである人間が、多様ではあれ基本的な枠組みの点では普遍性がある文化を作るのです。それゆえ、どのような文化で育とうと、人間というものはだいたい似ています。この章での議論の結論を一言でまとめるなら、言語や文化の多様性<sup>(2)</sup>は人間にとって理解可能な範囲にとどまるのです。

ただし、ブラウンが列挙したような特性が地域や文化を超えて広くみられるからといって、「このようなあり方こそが人間として正しいあり方だ。それ以外の生き方をするのは間違っている」などと考えるのは早計です。「事実としてそうである」ということと、「そうすることが正しい」ということは、別のことです。「正しさは人それぞれ」ではないですが、だからといって「真実は一つ」でもありません。

次の章からは、そもそも「正しい」とはどういうことか、それがどのようにして作られるのかについて考えることにしましょう。

(出典) 山口裕之 『「みんな違ってみんないい」のか？ 相対主義と普遍主義の問題』(筑摩書房, 2022年)69-82頁

なお、出題にあたり、縦書きを横書きに変更し、一部の漢数字は算用数字に置き換えた。また、原文にあった小見出しを省き、原文にない(注1)～(注7)を追加し、文章を一部省略したうえで、太字の箇所を通常の文字に改めた。

(注1) ミード マーガレット・ミード(1901～1978)。アメリカの文化人類学者。

(注2) 『サモアの思春期』 マーガレット・ミードの著作。西ポリネシアの島国であるサモアで思春期の少女たちについて調査を行った結果をまとめている。サモア文化において育つ少女は西洋文化において育つ少女とは違い、身体的には第二次性徴期を迎えたとしても、精神的には不安定になることはないとする。

(注3) デレク・フリーマン ニュージーランドの人類学者。

(注4) フェミニズム運動 政治的、経済的、社会的な文脈における両性の平等や女性の権利の確保を目指す運動のこと。

(注5) ドナルド・ブラウン アメリカの人類学者

(注6) インセスト 近親の特定範囲内にある男女間の性交渉のこと。近親相姦。また、近親婚のこと。

(注7) 呪術 神や精霊などの超自然的な力や神秘的な力に働きかけ、種々の願望をかなえようとする行為および信念のこと。

#### [設問]

問1 下線部(1)主張に対してフリーマンはどのような見解を示しているか。問題文でフリーマンの見解として著者が挙げていることを、100字以内でまとめなさい。(配点20%)

問2 下線部(2)について、「理解可能な範囲にとどまる」とされるのはなぜか。問題文で著者が述べていることを、100字以内でまとめなさい。(配点20%)

問3 下線部(A)のように著者が述べる理由をふまえて、下線部(A)の著者の主張についてのあなたの考えを600字以内で述べなさい。その際、問題文で挙げた具体例を用いてもよい。(配点60%)

## 採点・評価基準(具体的基準)

教科・科目名	小論文（後期日程試験：令和5年度）	問題番号	S C
対象学部・学科(課程)等	人文社会科学部（法学科）		
出題のねらい	<p><b>問1</b> 問題文の趣旨を理解するうえで鍵となる著者の認識をまとめさせることによって、文章の読解力及び言語表現力を測ることを狙いとしている。</p> <p><b>問2</b> 問題文の趣旨を理解するうえで鍵となる著者の認識をまとめさせることによって、文章の読解力及び言語表現を測ることを狙いとしている。</p> <p><b>問3</b> 問題文の趣旨を踏まえて自己の考えを展開させることにより、文章の読解力、論理的思考力、社会的問題への関心の高さ、言語表現力を測ることを狙いとしている。</p>		
採点基準	<p><b>問1</b> 配点 20% (80 点) 設問の指示に従って、問題文のうち下線部の示す具体的内容を正しく理解し、十分にまとめられているか否かをみる。</p> <p><b>問2</b> 配点 20% (80 点) 設問の指示に従って、問題文のうち下線部の示す具体的内容を正しく理解し、十分にまとめられているか否かをみる。</p> <p><b>問3</b> 配点 60% (240 点) 設問の指示に従って、問題文の主要動機を正しく理解しているか、そして、それを踏まえて自己の見解を表明し、その論拠を論理的に提示できているか否かをみる。</p>		